研究情報 2

イソフラボン含量の高い大豆新品種「ふくいぶき」

水田利用部
大豆育種研究室
境　哲文
SAKAI, Tetuhumi

左から二人目が筆者

国産大豆の生産量は水稲と並び本作に位置付けられたことで，平成22年度の生産目標25万ｔを，13年度には早くも上回り，作付面積14万4千ha，生産量27万1千ｔとなりました。作付面積および生産量は当面の目標を達成したものの，現在は“質”に重点を置いた取組みが求められています。今回紹介する「ふくいぶき」は，従来の品種より質（機能性や加工適性）・量（収量性）ともに優れた品種であり，福島県で平成14年度から奨励品種に採用され，高イソフラボンを売りにした商品開発も進んでいます。

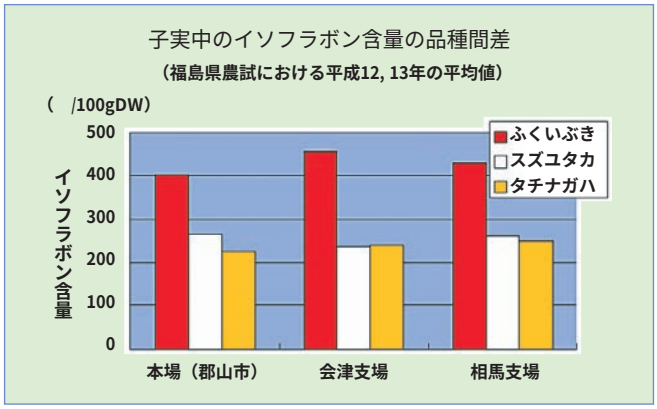
《「ふくいぶき」の特徴》

大豆にはさまざまな栄養・機能性成分が含まれており，なかでもイソフラボンは抗がん作用や更年期障害の改善等に効果があるとして，最近特に注目されています。東北中南部から北陸地域向けに育成された「ふくいぶき」は，このイソフラボンを従来の品種より多く含んでおり，普通畑，水田転換畑いずれにおいても従来の品種より高い含量を示します。

ふくいぶき　　スズユタカ

ふくいぶきの草姿

特に晩播栽培では含量が高くなるため，麦あと大豆のように通常より播種期の遅い栽培体系は高含量化（高付加価値化）が期待できます。



この地域の代表品種「スズユタカ」と比べ，収量性がより高く，草丈が短く倒れにくくなっており，機械化栽培体系により適しています。また，褐斑粒を生じ等級低下の原因となる大豆モザイクウイルス病や収量低下をおこす大豆シストセンチュウに対し抵抗性を持っているため，特に弱点が無く作りやすい品種です。

「ふくいぶき」を使った加工食品の例

実需者からは豆腐加工に適しているとの評価も得ていますし，質・量ともに優れた特性を具えた「ふくいぶき」は生産・販売両面で有利な品種といえます。

《ふくいぶき生産上の留意点》

栽培上の留意点としては，「スズユタカ」より短茎化し倒伏程度は小さいものの，最下着莢節位高はそれほど高くないので，コンバイン収穫時の刈り残し，汚粒の発生要因となる土の巻き込みには注意する必要があります。また，連作障害を回避するため，適切な輪作のもとで栽培を行うことが望まれます。